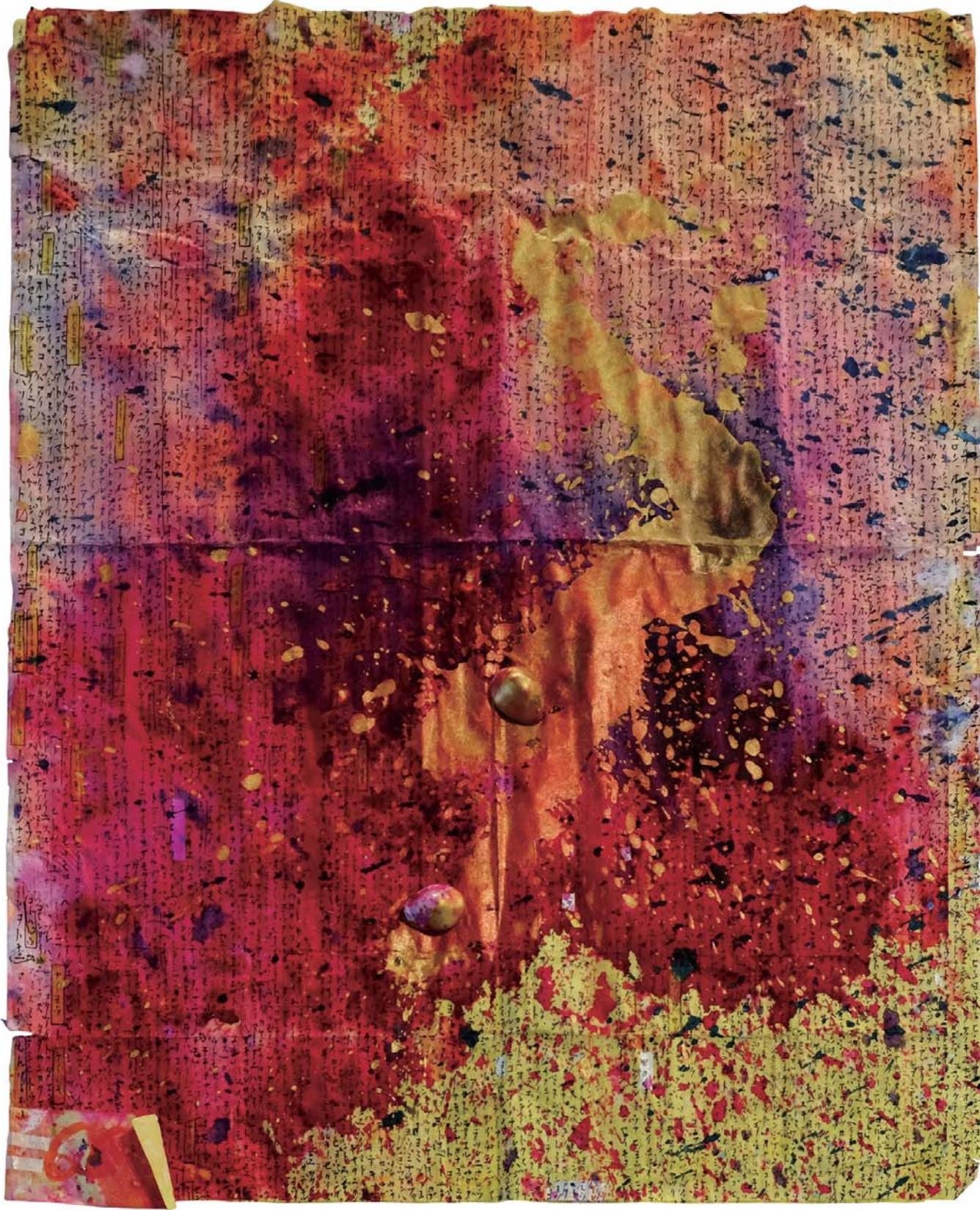


おきみゅー通信

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum News Letter

vol.07 春号



＼愛称がおきみゅーになりました！

吉増剛造《火ノ刺繡》2017年 作家蔵



沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

博物館企画展

新収蔵品展 -平成29年度収蔵資料-

前年度の新収蔵資料の数々を一堂にご紹介する毎年恒例の展覧会です。

5/22(火)
2018 6/24(日)

博物館企画展示室

一般 500(400)円、高校・大学生 300(240)円、小・中学生 150(120)円

※()内は20人以上の団体料金



三線 与那城型 銘玉城/與那

(平成6年 県指定有形文化財)

沖縄県指定有形文化財20挺の三線の中の一つ。材質はリュウキュウコクタン(上質)で、製作年は明治後期のものと考えられる。首里の玉城御殿に伝来するものといわれ、1921年(大正10年)の三線名評会でハワイ在住の県系人によってハワイに渡ったとされる。戦後、島袋正雄氏が購入した。この度、同氏のカジマヤーの祝いにあたり、所蔵の貴重な三線の贈呈があった。



博物館班長 國原謙

今回展示される新収蔵品の中でも一番の目玉である
県指定有形文化財「三線 与那城型 銘玉城／與那」
について当館博物館班長の園原に聞きました。

指定文化財の三線20挺の内の一つ は大変貴重なものですね

はい。琉球政府時代の1955年、名器とされていました三線3挺(「翁長開鐘」「志多伯開鐘」「湧川開鐘」)がいち早く特別重要文化財に、その他の名器8挺も1958年までに重要文化財として指定され、1972年の本土復帰に伴い沖縄県指定有形文化財となりました。1995年にはさらに「与那城型銘玉城／與那」を含む9挺が追加され、現在では計20挺の三線が工芸品として指定されています。琉球政府時代に、楽器としての三線を美術工芸品として指定したことは特筆すべきことで、現在でも三線を美術工芸品として文化財に指定しているのは沖縄県だけです。

また、三線には「南風原型」「知念大工型」「久場春殿型」「久葉の骨型」「真壁型」「平仲知念型」「与那城型」と呼ばれている七つの型があり、「久葉の骨型」を除く全ての型の名称が、製作した工人の名前に因んでいます。「与那城型銘玉城／與那」は与那城さんが祖型をつくったものなのですよ。

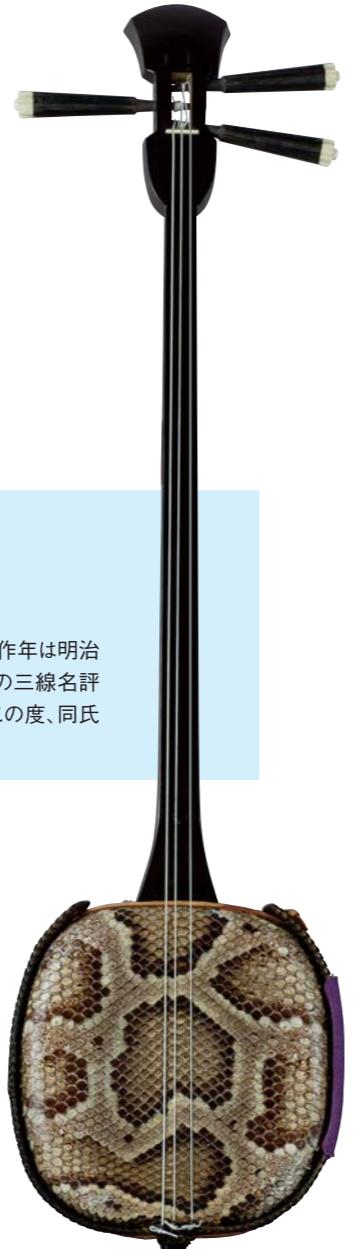
この三線(与那城型 銘玉城／與那)は ハワイにも渡っていたのですね

そうです。「与那城型 銘玉城／與那」の他にも、明治の後期から大正の初めにかけて、首里や那覇の旧家から多くの家宝三線がハワイへ渡りました。1951年の段階で、ハワイには少なくとも5,000挺もの三線が移動していました。それはハワイに移民したウチナーンチュが買い求めたためです。その背景には当時の沖縄の貧しさがありました。旧家の多くが背に腹は代えられないということです。家宝の三線を泣く泣く手放したのです。

しかし、もそのまま沖縄に残っていたら、戦争で焼けていたかもしれません。私はこのことを、文化の伝播であり文化財の疎開だと考えています。戦後、沖縄が豊かになってきてハワイから多くの三線が買い戻されました。

沖縄三線の特徴とは

元々、三線は中国から伝わったが、琉球の三線の形状を中国の三線と比べると2カ所に大きな改変がみられます。棹の長さが1尺ほど短棹になったことと、共鳴具である



胴の直径が一回り大きくなったことです。これらによって、奏でる音程が高くなり、音量が大きくなりました。中国三線はベースのような脇役だったのが、琉球三線は声楽の伴奏楽器として主楽器として躍進しました。その中からよく鳴る三線が誕生することになり、家宝として代々継承されていきました。

最後に三線の名器の鑑賞の仕方や 見るべきポイントを教えてください

ズバリ曲線の美! 人間と一緒に形は左右対称ではありません。三線には音を出すための様々な工夫が施されており、その中で生み出された曲線美を鑑賞してほしいです。

沖縄三線は沖縄を代表する楽器であり、世界に誇れる楽器です。ぜひ、本展で注目してご覧になってください。

美術館企画展

涯テノ詩聲 詩人 吉増剛造展

見どころについて本展覧会の企画者である足利市立美術館の篠原誠司学芸員に話を聞きました。

4/27(金)
2018 6/24(日)

美術館企画ギャラリー1.2

一般 1,000(800)円

高校・大学生 600(480)円

小・中学生 300(240)円

※()内は前売および20人以上の団体料金



足利市立美術館 篠原誠司 学芸員

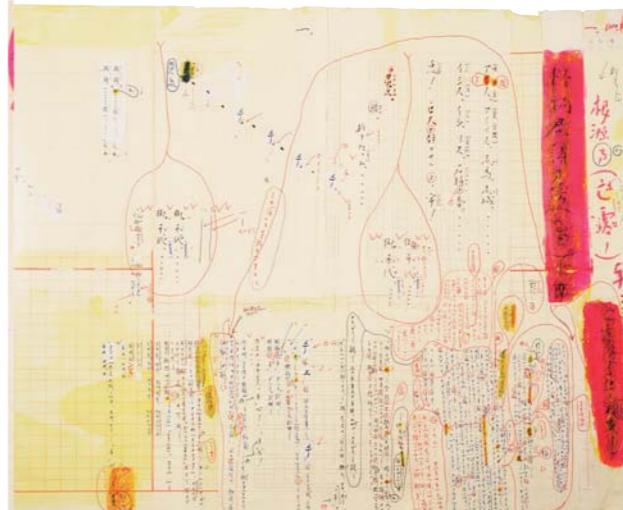
吉増剛造(以下吉増さん)について 教えてください

吉増さん(1939-)は、1960年代から現在にいたるまで日本の現代詩をリードしていました。その活動は文学の領域にとどまらず、写真や映像、造形作品など多岐に渡り、私たちを魅了しています。

吉増さんの作品を図録で拝見しました がすごく独特ですね

吉増さんの詩(作品)はどれも謎が多いですね、とても…なぜこのような詩が生まれたのか? 非常に国際的に高い評価を受けていて、なぜこのような難解な詩が皆さん的支持を得ているのだろうか? 本展覧会ではこの謎について、吉増さんが勉強してきたことや関わってきたこと、関わってきた人達から解き起こしていく展覧会です。詩の生まれた背景や吉増さんが活動してきた背景を詩や写真をはじめとする作品群に加え、吉増さんと関わりのある28名の作家たち(※1)の作品や資料とともに時代を追って巡っていくところが特徴的です。

また、吉増さんは80年代に何十回も沖縄に来ていて、沖縄に対する思いはすごく深く、その中で注目してご覧になってください。



『根源乃手/根源乃(亡露ノ)手、……原稿 2010年代 作家蔵』



「多重露光写真」2003年 作家蔵

いものがあって、今回はその吉増さんと沖縄とのつながりも特別展示で紹介したいと考えています。

「難解」な吉増さんの詩の楽しみ方を 教えてください

そうですね…。意味を考えずに、例えば言葉であれば、声に出して口ずさんでみると書いてある文字の別の姿が見えてくる気がします。日本語というイメージを壊していくことが吉増さんの詩の真髓だと思います。また、何重にもなった詩を展示している詩集や原稿を基に自分なりに読み解くのも楽しみの一つではないでしょうか。

写真作品について、多重露光で撮影 (風景が2重、3重になっている)のは なぜでしょうか?

吉増さんが多重露光撮影を始めたきっかけは、たまたまフィルムカメラで誤って重ね撮りをしたことでした。その時、現像した写真を見てもすごい衝撃を受けた話しています。一つの詩の中で色んな要素(時間、土地、場面など)が重なり合っているも

のが吉増さんの詩であり、その詩と一緒に色々な場所や時間が重なり合う写真がおそらく必要であったのではないでしょうか。1994年~2008年(約15年)の間は意図的にネガをシャッフルさせ、多重露光写真を何枚も撮っています。

最後に篠原学芸員の一番好きな作品 を教えてください

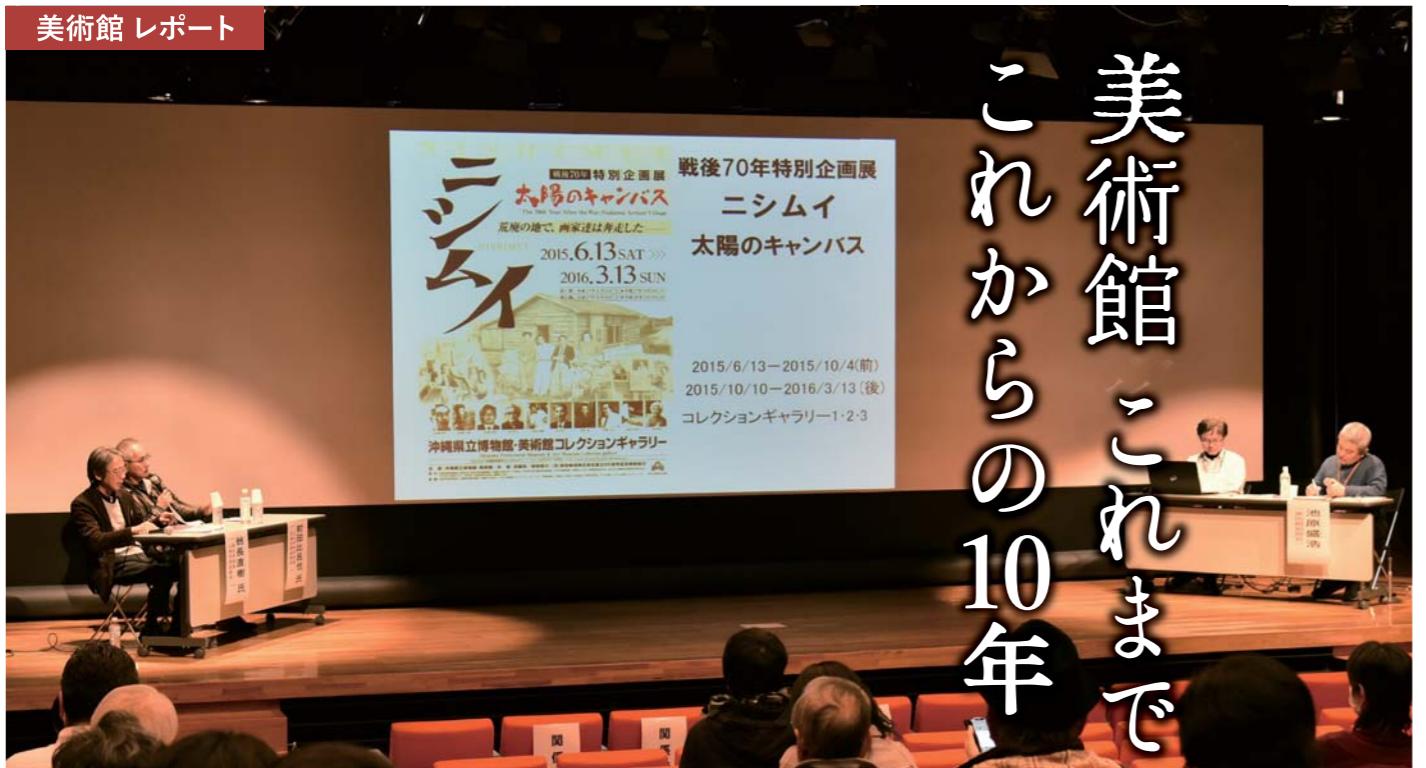
はい。ズバリ、詩集『オシリス石の神』(84年出版)です。当時の吉増さんは激しく詩を朗読されていてすごかったです。この『オシリス石の神』の詩の朗読を野外で山下洋輔のピアノとセッションしたこともあるですよ!

——詩の朗読とジャズピアノのセッションはすごくかっこいいですね!

会期中は吉増さんご本人もオープニングアーティストトークなどの関連イベントで何度もいらっしゃいますので皆さんお楽しみに。

(詳しい情報は7ページの美術館イベント情報をチェック!)

(※1) 出品作家: 吉増剛造 赤瀬川原平 芥川龍之介 荒木経惟 石川啄木 浦上玉堂 折口信夫 加納光於 川合小梅 川端康成 北村透谷 島尾敏雄 島尾ミホ 高村光太郎 濱口修造 東松照明 中上健次 中西夏之 奈良原一高 西脇順三郎 萩原朔太郎 柳田國男 吉本隆明 松尾芭蕉 南方熊楠 森山大道 与謝蕪村 良寛 若林奮



2/3(土)に開催された「美術館開館10周年記念シンポジウム」の様子

10年を振り返って

美術館は昨年度、開館10周年記念展として「彷徨の海-旅する画家南風原朝光と台湾、沖縄」と「邂逅の海-交差するアーティズム」の二つの展覧会を開催しました。

展覧会最終日の前日には展覧会の総括としてシンポジウムを行い、台湾芸術大学人文学院 廖新田院長をお招きし、テーマ「台湾の発見:台湾の美術発展と日本」の基調講演のほか、当館からは企画担当の豊見山愛学芸員が「南風原朝光と台湾、東京、沖縄」について発表し、台湾と沖縄の美術動向を考えていきました。

後半は、当館の美術館副館長経験者を招き、「これまでの展覧会の振り返りとこれからの美術館像を模索する」をテーマにパネルディスカッションを行いました。舞台スクリーンには、10年間で催された展覧会が、担当した学芸員とともに紹介されました。

沖縄の芸術文化を網羅した開館記念展覧会を皮切りに、美術館の収蔵品の中で半数以上を占める写真に関するものやアジアの中の沖縄の美術を探るもの、沖縄からの移民となった作家関連〈沖縄のルツシリーズ〉、戦後沖縄の美術界の礎を作ってきたニシミイに係る沖縄の美術家〈沖縄の美術シリーズ〉、そして当館収蔵の作品をもとに展示するコレクション展の数々な

どがあり、これら展覧会で多くの県民の皆様に芸術文化の発信と沖縄美術の位置づけが提案できたのではないでしょうか。

さらに10年間の成果として二つの事柄が紹介されました。一つは、東京の板橋区立美術館において当館所蔵の作品が出品される展覧会「東京=沖縄 池袋モンパルナスとニシミイ美術村」が開催されると、もう一つは現在小学校で使用されている教科書のひとつに当美術館の教育普及で活用されている『ティーチャーズキット』の実践が掲載されたことです。これらは当美術館の10年間の活動が認められた結果だと受け止めています。



当館「ティーチャーズキット」を活用した鑑賞授業

これから10年、美術館これまでの10年、

これからの美術館

今後の美術館の方向性としては、開館以来の理念を引き継ぐものとして、以下の3つをあげます。

1. 沖縄及び沖縄ゆかりの近現代美術
2. 日本及び沖縄を取り巻く
アジア諸国の美術
3. 美術史を理解する上で必要な
国内外の美術

これらのテーマを美術館の学芸員の日々の調査と研究のもと、企画し展覧会を開催し続けていくことが重要だと考えます。

十年一昔と言われますが、10年間の実績を踏まえ、「彷徨の海」展で台湾と沖縄の美術動向を捉えたように今後もアジア諸国から見た沖縄の美術について考える展覧会を、「邂逅の海」展で若手作家を取り上げ表現の可能性を探ったように、沖縄にある美術館として沖縄でしかできない展覧会を企画し続け、県民に親しまれ成長する美術館を目指したいと思います。

(美術館副館長 池原盛浩)

石ころと島々に隠れたドラマを伝えたい ～北大東島ジオツアーを通して～

大東島が動いている！

フィリピン海プレートに乗っている大東諸島。過去の環礁が隆起した島は、年間約5~10cmのスピードで沖縄島の方向に近づいています。学生時代それを聞きなんとも言えない不思議な感覚になりました。そして30年来の思いが叶い、北大東島の隆起環礁のてっぺんに立ったとき、あらためて地球は生きており、そしてたえず変化していることを実感したのでした。



南大東島上空から見た北大東島 南北大東島間はわずか7kmですが、水深は約2000mあります

石ころに隠れたドラマ

生命が40億年の歴史の中で少しづつ進化し今の姿になったように、岩石や鉱物、化石そしてそれらで構成される島々にも今の姿に変化するまでのドラマがあります。大東諸島の場合、4800万年のドラマが

あります。目の前の島々を作る岩石にこうしたドラマが隠れているかと思うと、テンションが上がり、興奮してしまいます。島の子ども達にもこの思いが伝わっているといいのですが…。



島の周囲は、大東石灰岩（苦灰岩：ドロマイト）の絶壁に囲まれています（上陸公園）

沖縄の島々の地学的魅力と私の仕事

沖縄県は亜熱帯に位置し島々は日本の国土のわずか1%にも満たないものですが、広大な海域に分布するため島によってその成り立ちが少しづつ異なります。そのため、古くから様々な分野の研究者が調査研究に入り、島々の地史を明らかにしてきました。しかし、今もなお新しい発見があります。道ばたに転がっている石ころでも詳細に調べることで様々なことが明らかになるのです。様々なドラマをもつ島々と岩石ですが、ただ眺めているだけでは何も語ってはくれません。そのドラマを引き出し、島々と岩石の魅力を一般の人へ分かりやすく伝えたいと常に思いながら仕事をしています。さらに岩石に隠れた過去と今を知ることで、こ

れからの変化、つまり未来を推測することもできると考えます。展示やジオツアーを通して参加者にはそれを考えるきっかけにしていただけたらうれしく思います。

おわりに

島と岩石に対する思いをいろいろ綴つましたが、私自身勉強不足で知らないことが山ほどあります。また、何度も足を運んでいるフィールドでも訪れるたびに新しい発見があります。これからも勉強しながら調査研究を続け、必要に応じて資料収集していきます。そして、今後は展示にも力を入れ、沖縄県内の石に隠れたドラマとその魅力を来館されたお客様へもより分かりやすく伝えたいたらと思う今日この頃です。

素晴らしい標本を採取し、満足げな石好き少年
(石置き場ピラミッド)

最後になりますが、北大東島移動展・ジオツアー開催にあたり、ご協力いただきました北大東村教育委員会をはじめ、北大東村、南大東村の皆さんに心より御礼申し上げます。

(博物館班 地学担当学芸員 宇佐美 賢)

『Oh my MAP』

～新都心地域をめぐる“福の神”探しへGO～

『Oh my MAP』とは

那覇新都心地域を盛り上げたいという熱い思いから、昨年、地域と当館を結ぶまちまーい(まち巡り)MAPを作り、第一回は周辺地域の「29」の店舗の賛同を得て実施(期間:2017.1/12~3/31)。MAPを片手に地域に潜む“福の神”を探し、写メを撮ると特典がもらえるというもの。“福の神”は全て沖縄県立芸術大学の学生手作りで、周辺地域を巻き込んだユニークな取り組みとしてマスコミにも取り上げられ話題となった。



沖縄県立芸術大学の学生がデザインした“福の神”的々々

去る2月、第二弾開催に向けて県立美術館支援会happのメンバーと意見交換を行いました。

参加メンバー: 県立美術館支援会happ (添石理事、國吉、和田) 沖縄美ら島財団 (前川、金城、福治)

福治) 第一回を終えて良かった点は近隣施設(店舗)とつながりができたことです。初の試みで不安があったが、予想以上の賛同施設(29店舗)が集まり、当館に対する期待の大さを感じました。反省点はMAP制作に時間がかかりスタートが遅れたことです。結果として実施期間が短くなってしまいました。



happ 國吉さん

添石理事) せっかく1年目のベースがあるので、まずはできるところから始めましょう。新都心通り会は通り会としての支援のやり方があると思うし、前回できた個々の店舗とのつながりを活かすことはとてもいいことだと思う。



happ 添石理事

和田) 前回のMAPは店舗に合わせた内容だったが、今回は博物館らしく歴史的要素を入れたデザインにしたいですね。ただし、賛同施設の商業的視点とどう絡めるかが悩みどころです。



happ 和田さん

國吉) いい考えだ! 昔はこの一帯(天久地区)に闘牛場があったんだよ(ワハハ笑)。

今の人達はそんな歴史を誰も知らない。そんな地域の面白い歴史が学べるMAPにしたい!

第二弾始動!!!



毎月楽しいイベント
が盛りだくさん
だみゅ~

4・5・6月のイベント情報



文化講座



[各回共通] 時間 14:00~16:00 場所 講堂 定員 200名

4/21土 沖縄と台湾、歴史の接点を考える

講師 笠原政治氏

5/19土 阿児奈波と大和

講師 井上さやか氏

6/16土 沖縄と東京大学野球部(仮)

講師 浜田一志氏

学芸員講座

[各回共通] 時間 14:00~16:00 場所 博物館講座室 定員 80名

4/14土 考古

講師 山本正昭

5/12土 歴史

講師 外間一先

6/2土 美工

講師 與那嶺一子

展示解説会

[各回共通] 時間 14:00~15:00 場所 博物館常設展示室 ※当日有効の常設展観覧券が必要

4/12木 地学

講師 宇佐美賢

5/10木 美工

講師 篠原あかね

6/14木 人類

講師 山崎真治

バックヤードツアー

[各回共通] 時間 14:00~15:00 集合場所 ふれあい体験室前 定員 12名

※当日9:00より総合案内で受付

4/28土 美工

講師 與那嶺一子

5/26土 地学

講師 宇佐美賢

6/23土 人類

講師 山崎真治

ふれあい体験室ワークショップ

毎週土曜 開催 ふれたい博士のつくりおもちゃ

時間 1回目 10:00 2回目 10:30 3回目 11:00 4回目 11:30

※所要時間30分

場所 エントランス 参加費 100円 対象 5才から大人まで

定員 当日先着40名(各回10名) ※当日9:00よりふれあい体験室にて 全ての回を受付

※講師都合により日程やタイトルなど
予告なく変更する場合があります。
詳細はHP・チラシをご確認ください。

「涯テノ詩聲 詩人 吉増剛造展」関連催事

4/27金 オープニングアーティストトーク

時間 10:00~ 場所 美術館企画ギャラリー

講師 吉増剛造氏

※当日有効の美術館企画展観覧券が必要

4/29日 対談「螺旋から地底へ」

時間 14:00~ 場所 講堂 定員 200名

講師 吉増剛造氏 鶴岡真弓氏

(多摩美術大学芸術人類学研究所所長・教授)

5/27日 ギャラリートーク

時間 14:00~15:30 場所 美術館講座室・企画ギャラリー

講師 篠原誠司氏(足利市立美術館学芸員)

※当日有効の美術館企画展観覧券が必要

6/10日 ワークショップ「K-oto-ba(こ・と・ば)」

コレクティブ・オーケストラ
feat. 吉増剛造・大友良英】

時間 13:00~ 場所 博物館講座室 定員 40名(事前申込制)

講師 吉増剛造氏 大友良英氏

企画協力 有馬恵子氏

美術館コレクション展関連催事

4/14土 ギャラリートーク「沖縄美術の流れ」

時間 14:00~15:30 場所 美術館講座室・コレクションギャラリー

定員 50名

講師 稲嶺成祚氏

※ギャラリー内は当日有効の美術館コレクション展観覧券が必要

5/13日 ギャラリートーク「大和コレクション」

時間 14:00~15:30 場所 美術館講座室・コレクションギャラリー

定員 50名

講師 調整中

※ギャラリー内は当日有効の美術館コレクション展観覧券が必要

その他

5/19土 美術館学芸員講座

時間 14:00~15:30 場所 美術館講座室

定員 50名

5/19土 美術館ミュージアムツアーワーク

時間 10:30~12:00 定員 12名(事前申込制)

講師 富原圭子

[表紙作品解説] 吉増剛造《火ノ刺繡》2017年 作家蔵

詩作「石狩シーツ」の発表から20年あまりを経た2017年、北海道大学総合博物館での吉増剛造展「火ノ刺繡—『石狩シーツ』の先へ」の中で展示された作品。これら新作を制作する中で筆記されたものに展示会場で彩色が加えられ、13点の作品「火ノ刺繡」が生み出された。現時点での吉増の表現における最新の姿でもあり、半世紀以上におよぶ吉増の詩作のさまざまなヴィジョンが渾然と息づいている。

＼愛称がおきみゅーになりました！



[開館時間] 9:00～18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

※入館は閉館30分前まで

[休館日] 月曜日 (月曜日が祝日にあたる場合は開館し、翌平日が休館)

館内消毒休館 (6月28日～7月6日)

※休館日は変更することがあります

アクセス 駐車場は台数が限られておりますので、
できるだけ公共交通機関をご利用ください。

【バス】那覇空港発99番線 おもろまち3丁目バス停下車〈徒歩5分〉

120番線 上之屋バス停下車〈徒歩10分〉

市内線 3.7.10番線 県立博物館前バス停下車

6番線 那覇メインプレイス東口バス停下車〈徒歩5分〉

市外線 バイパス経由 おもろまち駅前バス停下車〈徒歩10分〉

国道58号経由 上之屋バス停下車〈徒歩10分〉

おもろまち行 おもろまち1丁目バス停下車〈徒歩3分〉

【沖縄都市モノレール】ゆいレール おもろまち駅下車〈徒歩10分〉

[ホームページ] <http://okimu.jp>



編集後記 新年度が始まりました。真新しいランドセルを背に元気な姿で登校する子どもや新社会人となった若者のスクール姿を見かけ、私にも数十年前のフレッシュな気持ちが蘇ります。(笑)

さて、今号は皆さんに展覧会の魅力と当館の活動についてもっと深く知らうと追求した結果、ガッツリ読みものとして仕上がりました^^(笑) 最後まで全て読んでくれる人はいるのだろうか…(笑) 次号もガッツリいきますよ♪ お楽しみに!

(美ら男)

沖縄県立博物館・美術館 季刊誌

おきみゅー vol.07 春号

〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 TEL 098-941-8200 (代表)

[発行日] 2018年4月1日

[編集・発行] 沖縄県立博物館・美術館 指定管理者 一般財団法人 沖縄美ら島財団

一緒にアートの輪を広めませんか?
happ 会員募集中!

NPO法人
沖縄県立美術館支援会happ



★happの主な活動

- 美術館コレクションギャラリー
展示交流員事業
- 対話型鑑賞ツアーの支援
- 博物館・美術館の情報をお届けする
ラジオ生放送
- 会員向け見学会、講座、
出張ワークショップの開催

詳細は下記happ事務局までお問い合わせください。

NPO法人 沖縄県立美術館支援会 happ

沖縄県立博物館・美術館内

直通: 090-8290-0633

